

0 1	名古屋	自由ヶ丘小学校	キムラ ユウミ 名前 木村 優海
分科会番号	1 0	分科会名	家 庭 科 教 育

研究題目 生活をよりよくすることができる児童の育成

研究要項

1 研究のねらい

私は、家庭科の学習を通して、生活をよりよくすることができる児童を育成していきたい。このような児童を育成したいのは、情報化社会や環境の変化、家族形態の多様化、高齢社会など、多様で変化が激しく、予測困難な社会を生き抜くために、自分の力だけでなく、他者と協力しながら生活をよりよくすることができるようになることが大切だと考えるからだ。その上で、私の考える「生活をよりよくすることができる児童」とは、家庭科の学習において、自らの気づきや他者との関わりの中から、自分の課題をつかみ、解決しようと実践することができる児童である。

本学級の児童は、4月の家庭科の学習の際、「自分の課題って何?」「何ができるようになればいいかわからない」といった発言が聞かれ、自分の課題が見付けられていない様子が見られた。また、初めて調理実習をした際には、「このやり方で合っているのかな」「上手にできるか自信がない」といった発言や、活動に戸惑って手が止まってしまう姿も見られた。

これらは、自分の現状をつかめていなかったり、活動の見通しがもてていなかったりするからだと考える。また、一人で考えることによって、新たな気づきを得る機会が不足し、自分の学びに生かすことができていないからだと考える。

このような児童の実態から、児童が「目指す姿（何ができるようになればいいかといった基準）」を明確につかんだ上で活動に取り組むとともに、その活動を振り返って自分の課題をつかみ、次時への見通しをもって課題解決に向かうことができる学習活動を設定することが必要だと考えた。また、他者との関わりの中から、多様な考えに触れて、新たな気づきを得ることで学習の効果を高められるように、他者と学び合う場を設定する必要があると考えた。

以上の考えから、生活をよりよくすることができる児童を育成するために、以下の2点に重点を置いて実践を進める。

2 研究の手立て

手立て① 見通しをもって課題解決に向かうための「学習活動」の工夫

見通しをもって課題解決に向かうためには、児童が目標を意識して活動するとともに、自分の課題をつかむ必要があると考える。そこで、学習の始めに具体的な「目指す姿」を提示するとともに、課題や改善点を明確にするための振り返り活動を設定し、自分の課題をつかめるような学習活動を行う。「目指す姿」を提示する際には、絵図や具体物で示範をしたり、具体的な基準を設けたりする。振

手立て② 学習の効果を高めるための「他者と学び合う場の設定」の工夫

3 实践

(1) なぜ針と糸でぬうのだろう・・・・・・・・・・・・・・・・ 0.5 時間

(2) どのような用具や方法でぬうのだろう

裁縫道具について知ろう・・・・・・・・・・・・・・・・ 0.5 時間

針と糸を使ってぬってみよう（玉結び・玉どめ・なみぬい）・・・・・・ 2 時間

針と糸を使ってぬってみよう（返しぬい・かがりぬい）・・・・・・ 2 時間

針と糸を使ってぬってみよう（ボタン付け）・・・・・・ 1 時間

(3) 手ぬいを生活に生かそう（小物作り）・・・・・・・・ 3 時間

手立て① 見通しをもって課題解決に向かうための「学習活動」の工夫

Figure 1 shows a classroom activity where a teacher is demonstrating a knitting technique. The teacher is holding up a piece of white fabric with a purple pattern. In the background, a large screen displays a presentation slide titled "拡大見本を用いた実演" (Practical demonstration using enlarged samples). The slide is divided into two main sections: "ぬい方" (Knitting method) on the left and "さいほうマスターへの道のり" (The path to the master of the pleated pattern) on the right. The "ぬい方" section shows two examples of a "かがりぬい" (knitted) pattern, with handwritten notes and diagrams illustrating the process. The "さいほうマスターへの道のり" section shows two examples of a "ぬい目" (knitted eye) pattern, with handwritten notes and diagrams illustrating the process and measurements. The examples include handwritten notes and diagrams illustrating the process and measurements.

振り返り・かがりぬい 振り返しシート	
組 名前	
【さいほうマスターへの道しるべ】	【困ったこと】
(本返しぬい) ② ☐ すきまがぼぼない ☐ めい目の長さが4mm ☐ 表も裏もまっすぐぬえている	
(かがりぬい) ③ ☐ 間が4mmで等間かく ☐ 下がそろっている ☐ めい目の長さが4mm	【次できるようになりたいこと】
↓	
自分のミッション	
【さいほうマスターへの道しるべ】	【自分のミッションの達成度】
(本返しぬい) ☆☆☆☆☆ ☐ すきまがぼぼない ☐ めい目の長さが4mm ☐ 表も裏もまっすぐぬえている	達成度 ☆☆☆☆☆ 理由は、
(かがりぬい) ☆☆☆☆☆ ☐ 間が4mmで等間かく ☐ 下がそろっている ☐ めい目の長さが4mm	今日の子びが、小物づくりのどのようなところに生かせそうか？
(半返しぬい) ☐ めい目の長さや間が4mmで等間かく ☐ まっすぐぬえている。	

2

手立て② 学習の効果を高めるための「他者と学び合う場の設定」の工夫

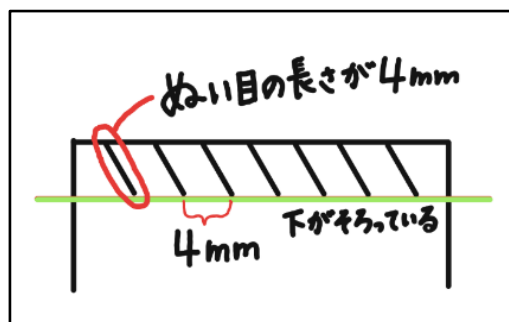
振り返り活動で明らかになった課題を解決する際、他者と学び合いながら取り組むことができるようにする。困っていることを共有したり、教え合ったりできるようにグループで活動することや、目指す姿に達した児童が「さいほうマスター」となり、他の児童に教えに行くことができる活動を取り入れる。題材後半の「(3)手ぬいを生活に生かそう（小物作り）」の活動では、話し合ったり、教え合ったりしやすくするため、製作手順が似た小物を作る児童同士でグループを組み、計画を立て、実践することができるようにする。

(3) 実践の様子

① 針と糸を使ってぬってみよう（返しぬい・かがりぬい）

第4時

本時の導入では、なみぬいよりも丈夫に縫える方法として「返しぬい」を、ほつれにくく縫える方法として「かがりぬい」を紹介し、本時のめあてを「返しぬいとかがりぬいをマスターしよう」と設定した。まず、拡大見本を用いて実演するとともに縫い方の動画を示し、縫い方を確認した後、児童が学習の見通しをもてるようにするために「さいほうマスターへの道しるべ」を示した。（手立て①）【資料3】



【資料3：かがりぬいの
「さいほうマスターへの道しるべ」】

次に、児童が練習布に返しぬい・かがりぬいを行った。活動中、いつでも縫い方を確認できるように、黒板のスクリーンで縫い方の動画をリピート再生で流したり、児童のタブレット端末に動画資料を配付したりした。また、児童が困りごとをいつでも共有できるように、グループで活動できるようにした。「さいほうマスターへの道しるべ」を達成した児童は、「さいほうマスター」となり、困っている児童に教えに行ってもよいことを伝える（手立て②）と、「マスターになれるように頑張ろう」という声が聞かれた。児童は、「さいほうマスターへの道しるべ」や動画資料で縫い方を確認したり【資料4】、グループの友達や「さいほうマスター」に縫い方を教えてもらったりする姿が見られた。

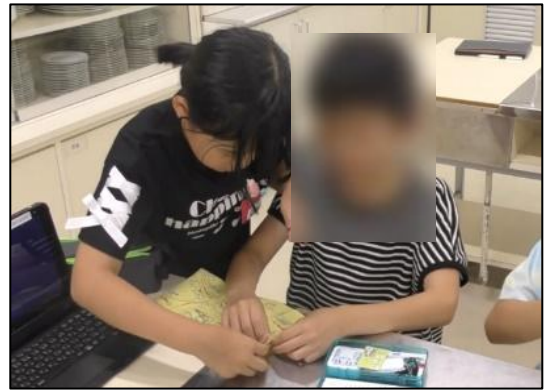


【資料4：動画資料で縫い方を確認】

振り返り活動では、「学習の始めに示した評価の観点（さいほうマスターへの道しるべ）の出来栄」「困ったこと」「次できるようになりたいこと」の3点を振り返った。（手立て①）「次できるようになりたいこと」には、「本返しぬいを真っ直ぐ縫ったり、隙間をなくしたりしたい」や「かがりぬいで、縫い目が4mmで、縫い目の下がそろうように縫いたい」と、「さいほうマスターへの道しるべ」を意識した記述が見られた。

第5時

第5時では第4時の振り返りを基に、本時の自分の目標（本実践では、「ミッション」と称する）を立てる活動を行った。（手立て①）本返しぬいで真っ直ぐ縫ったり、隙間をなくしたりしたい」や『『さいほうマスターへの道しるべ』のように、本返しぬいとかがりぬいの縫い目の長さを4mmにする』といった、自分の「ミッション」を立てている姿が見られた。裁縫の活動では、前時よりも「さいほうマスター」（手



【資料5：「さいほうマスター」による教え合い】

立て②）が増え、縫い方に困ったときは、「マスター教えて」と声を掛けている様子が多く見られた。「さいほうマスター」が、縫い方に困っている児童に「本返しぬいは、一針戻して縫うよ」や「かがりぬいは、ずっと布の表から針をさすよ」と教える姿が見られた。【資料5】

振り返り活動では、「学習の始めに示した評価の観点（さいほうマスターへの道しるべ）の出来栄」「（ミッションの）達成度」「今日の学習が、小物作りのどのようなところに生かせそうか」の3点を振り返った。（手立て①）「達成度」は、自分の達成度によって、星を塗れるワークシート（満点は星五つ）にした。星を五つ全て塗った児童は、「友達に布を見せたとき、真っ直ぐ縫えていると言われたから」と理由を記述していた。また、「本返しぬいで、隙間をなくして縫うことが苦手だったけれど、友達にアドバイスをもらってたくさん練習したら、隙間をなくして縫うことができるようになった」という発言が聞かれ、自分の課題をつかみ、他者との関わりを通じ、その課題を解決しようと実践している姿が見られた。

② 手ぬいを生活に生かそう（小物作り）

第7時

第7時からの小物づくりの活動では、自分の考えを伝えたり、友達の考え



【資料6：掲示した「さいほうマスターへの道しるべ」】

を自分の計画に

取り入れたりすることができるように、製作手順が似た小物を作る児童でグループ活動を設定した。（手立て②）第7時の始めに、小物作りの計画を立てる際、ペンケースを作るときに、どの縫い方にするか迷っていた児童は、グループの友達に「ペンをたくさん入れると、壊れてしまうかもしれないから、丈夫な本返しぬいで縫うとよいと思う」とアドバイスをもらい、参考にしていた。ま

た、資料6にあるように、学習したことをいつでも振り返ることができるように、今まで学習した「さいほうマスターへの道しるべ」を教室の前方に掲示した。(手立て①) 児童は、「さいほうマスターへの道しるべ」を見ながら、「ペンケースを作るときは、丈夫に仕上げたいから、本返しぬいをしよう」や「巾着を作るときは、簡単に縫うことができるなみぬいをしよう」といった計画を立てていた。

第8時

第8時では、まず前時に立てた計画を基に「ミッション」を考える活動をした。「なみぬいを真っ直ぐ縫う」や「本返しぬいを真っ直ぐ、4mmで縫い、きれいなティッシュケースにする」など、具体的なミッションを立てている姿が見られた。次に、裁縫に取り組む際、今まで学習した縫い方をいつでも振り返られるように、タブレット端末に動画資料を配付した。また、つまずいている児童が多かった玉どめのやり方を確認するために、ミニ授業を行った。児童は、掲示された「さいほうマスターへの道しるべ」を確認したり、動画資料を見たり、グループの友達と教え合っている姿が見られた。(手立て①、②)【資料7】



【資料7：グループの友達と教え合っている場面】

第9時

第9時の振り返り活動では、「(ミッションの) 達成度」「ぬい方やかざりつけで工夫したところ」の2点を振り返った。「ぬい方やかざりつけで工夫したところ」では、「ペンケースに物を入れると底に負担が掛かるから丈夫な本返しぬいにした」「ボタンを縫うときに、糸を固く引っ張りながら巻いて、壊れにくいようにした」など、状況に合わせて縫い方を選び、工夫している姿が見られた。出来上がったときには、「完成してうれしい」「これからいっぱい使おう」と声が多く聞かれた。また、ペンケースを作っていた児童が「次は巾着を作って、お母さんにプレゼントしたい」と言って、休み時間に作っている様子が見られた。

4 成果と課題

手立て① 見通しをもって課題解決に向かうための「学習活動」の工夫

○ 成果

具体的な基準を設けた評価の観点「さいほうマスターへの道しるべ」を示したことで、児童が目標を具体的に立てることができ、見通しをもって学習に取り組む姿が多く見られた。

● 課題

前時の振り返りが本時の「ミッション」につなげられていない児童がいた。児童が前時の振り返りを意識できていなかったり、ミッションの立て方が分からなかったりしたからだと考える。授業の始めに、前時の学びを振り返る活動をするとともに、教師が例を示したり児童同士で共有したりするなど、学級全体でミッションの立て方の共通理解を図る必要があったと考える。

手立て② 学習の効果を高めるための「他者と学び合う場の設定」の工夫

○ 成果

グループでの学習や「さいほうマスター」による教え合い活動を取り入れたことで、児童が互いに学び合う姿を引き出すことができた。

● 課題

困っていることを共有したり、教え合ったりできるようにグループで活動したが、何をすればよいか分からず小物作りの活動中に手が止まってしまっている児童がいた。教師が、もっとグループの教え合い活動が活発になるように児童同士をつなげる声掛けをしたり、困っている児童を集めてミニ授業をする頻度を増やしたりなど、教師支援をさらに多くする必要があったと考える。

小物作りの計画を立てる際に、互いの意見や考えを取り入れながら計画を立てていない児童がいた。自分の考えを伝え合う時間が足りなかったからだと考える。伝え合う時間を十分に設けるとともに、他者の考えの中でよいと思ったことを記述したり、自分の計画に生かすことができるようにもう一度考え直したりする活動を設定する必要があったと考える。

5 実践のまとめ

児童が「目指す姿」をつかんだ上で活動に取り組み、自分の課題をつかむことはできたが、次時への見通しをもつことやグループ内で教え合い活動を活発にすることに課題が残った。今回の実践を通して、教師が、児童の困り感を具体的な姿で想定し、それに対する複数の支援を事前に考えて授業に臨むとともに、児童が安心して話し合いができる学習環境を整えることが大切だと学んだ。今後も、児童が活動の見通しをもてたり、自分の課題をつかみ、解決しようと実践したりできるような授業を組み立て、生活をよりよくすることができる児童の育成を目指していきたい。